

第8号

発行日：平成11年3月17日
発行者：医学部広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学医学部広報紙

医学部ウォーカー

- 1面：「鵬桜医学振興会」発足
- 2面：コンピュータ西暦2000年問題
- 3面：動物実験施設の現状
- 4面：生涯学習社会における公開講座
- 5面：弘前医学創刊50周年
- 6面：各賞受賞者紹介

題字 医学部長 遠藤正彦氏筆



発会式(3月1日)中央は会長に就任し議長役となった遠藤医学部長

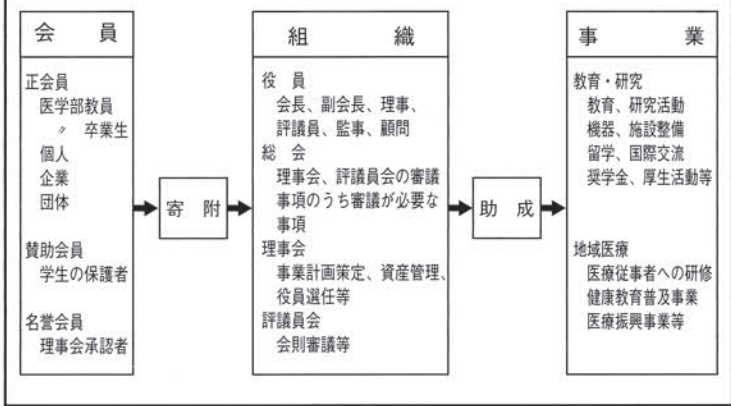
医学部後援会
「鵬桜医学振興会」発足

医学部の活性化に伴い弘前ので開催する国際シンポジウムや各科の主宰学会等が多くなり、運営費の管理などの透明性が求められる。一方、国の財政的な困窮から、医学生に対しての医学の進歩に際した教育的設備・備品の充足への予算の裏付けが少ない。このような状況を背景に、十一月四日の教授会で将来の公益法人を目指した後援会に向けて医学部後援会検討委員会(遠藤正彦委員長)の発足が決定した。

昭和六十二年六月に文部省より大学の後援法人の設立許可等の取扱いについての通知によると設立要件としては、
一、目的は教育又は研究の振興に資するもの。
二、事業は教育研究に対する支援事業を主とし、教職員員の福利厚生等を主たる事業としないこと。
三、組織は同窓会組織との区別が明確であること。
四、必要な確固とした財政的基盤を有していること、
五、必要と認められること、
六、財政的基盤として三億円が必要とのことで、現時点での三億円の計上は困難

であり、当面は任意団体を設立し、青森県の許可による法人化を目指し行動を開始することとなった。他大学の後援会組織の把握を行う一方、鵬桜医学振興会準備会の名称の下に石戸谷柝一鵬桜会理事長をはじめとする鵬桜会役員との会合を繰り返し、会の構成、会則、申し合わせ事項が決定された。次いで三月一日医学部コミュニケーションセンターで鵬桜医学振興会の発会式が開催され、医学部への発展への貢献が期待される後援会組織がスタートした。(棟方記)

鵬桜医学振興会概念図



鵬桜医学振興会役員名簿

医学部長寄稿

暗い長いトンネルの出口が見えてきた大学改革の中で

医学部長 遠藤 正彦



昨年末の教授会で、当医学部及び附属病院が授与するいわゆる「医学部三賞」、医学部学術賞、医学部国際化教育奨励賞及び新設の附属病院診療奨励賞と唐牛記念医学研究基金助成金の各選考委員会から授賞者の発表とその選考経過の報告があった。十七回を数える唐牛記念医学研究基金助成金以外は、ここ三年以内に開

始されたもので日が浅い。しかし、これらの賞は、教育、研究、診療をしっかりと評価し、若い教官、院生、研究生を鼓舞し、当医学部を活性化させる目的で設置された。

そのもくろみは正に的中した。医学部学術賞選考委員長である泉井亮教授と唐牛記念医学研究基金助成金選考委員長である蔵田潔教授の選考経過の報告では、応募者が増加し、その応募者の論文は、ほとんどがレベルの高い国際誌に発表されたもので、選にもれた論文も決して劣るものではない

明らかに当医学部の若い研究者の研究レベルが急速に向上しつつあることを示している。このことは、本年度の大学院学位論文予備審査にも表れていて、学位申請四十七件中少なくとも十九件の論文が英文論文であり、昨年より増加している。

我々の誰もが、約十年前、全国の医学部・医科大学毎の国際誌への発表論文に関するランキングを見て、当医学部の順位があまりにも低いことを知って愕然とした。そして文部省科学研究費助成金の採択件数のランキングの低いことも知って一層驚いた。様々な大学ランキングにおける当医学部のレベルの低さから多くの教官は失望した。

しかし、大学設置基準の大綱化とそれに伴う医学部進学課程の廃止を受けて、当時の吉田豊医学部長を中心とした教授会は、大学改革に着手し、六年一貫教育の実施、大学院学位審査制度の見直し、及び国際化教育の奨励を行った。以来この劣悪な状況から如何にし

て脱出するかを努力してきた。最近「どうせやらねばならないなら他大学より早く、そして他大学にはないことを」を合言葉に、全学部一丸となって大学改革に取り組んできた。そして、石戸谷柝一理事長を先頭とする医学部同窓会鵬桜会も種々の面で支援に乗り出してきた。

医学部は今燃えていると評価してくれる人がいる。五回連続開催予定の弘前国際フォーラムも順調に回を重ね、国際誌への論文発表も、文部省科学研究費の申請も採択も、確実に増加している。学生の東日本医科学学生体育大会でも優勝入賞数が増加している。そしてこういった医学部の新しい動きは、この医学部の広報誌「医学部ウォーカー」によって確実に内外に知らされていく。平成十一年度の文部省概算要求の内示には、医学部として現附属脳神経疾患研究施設の増設と、それに代わった新しい「附属脳神経血管病態研究施設」の新設と、新設講座・臨床薬理学講座が認められ、一方附属病院では、国家公務員定員削減という厳しい環境の中、看護婦三名の純増が認められている。医学部や同附属病院の評価が少しずつ高まっているものと理解したい。

当医学部は創設以来、先人達の努力と現在の教職員の努力が、今どうやらやっと思われ、暗いそして長いトンネルの先にやっと思われ、この暗い長いトンネルを早く抜け出したいものである。

コンピュータ西暦二〇〇〇年問題

医療情報部 羽田 隆吉



(1) コンピュータ西暦二〇〇〇年問題を取り巻く状況

今日、コンピュータは社会活動のあらゆる部分に入り込み、それなくしては、もはや社会が成り立たなくなっている。パーソナルコンピュータ(パソコン)、ワークステーション、メインフレーム(汎用機)等といったいわゆる「コンピュータ」だけでなく、色んな制御系で「部品」として用いられるコンピュータ(マイクログリップなど)まで考慮にいれると、それこそ、核弾頭ミサイルの発射制御から、自動車駆動輪の力分配、さらには電気釜の御飯の炊きあがりまでコンピュータが関係し、いかに現代社会がコンピュータに依存しているかが理解される。

(2) コンピュータ二〇〇〇年問題と問題が起った背景

コンピュータ二〇〇〇年問題とはコンピュータが西暦二〇〇〇年一月一日以後の日時を正しく処理できないため、誤動作・停止することである。もう少し詳しくいうと、コンピュータシステム(ハード、ソフトを含める)で西暦年を下二桁で処理する方式、つまり西暦「一九XX」を取扱うのに「XX」のみを変数とする方式が取りだされた結果、時系列で見たデータの順序が狂ったり、正しく日付入力を行ってもエラーと表示されたり(例えば「二〇〇〇年の予約」を入力すると、コンピュータはこれを〇二として取扱うので「一九〇二年の予約」と見做し、過去に対する予約は不可と判断、入力エラーを表示する)、期間が関係する演算であり得ない値(例えばマイナスの年齢、マイナスの利子云々)が出力されたり、結局コンピュータ自身あるいはこれを搭載する機器が誤動作・停止してしまうことである。この他に二〇〇〇年問題など派生的な事象が幾つかあるが、おおよそ我々が頭の中で想像するような事態は可能性としては全て起こり得ると考えておかねばならぬ。

それでは、なぜ世界中で混乱させるような事態が切迫するに至ったのか。一九六〇年代、一九七〇年代のコンピュータ導入時代では、コンピュータの記憶容量や処理速度が十分でなかったため、できる限り情報量を減らす目的で、西暦年の上二桁を省くという方針が選択された。当時、メモリや記憶装置の「ビット」は「血の一滴」といわれるほど貴重であったし、西暦一九〇〇年代を前提として「下二桁」で行くという方針が取られたときには、確かに「二〇〇〇年」は遙か遠くのことという意識もあつたのである。その後、一九八〇年代のコンピュータ普及時代に、既存のプログラムやデータといった資産を生かしながら、機能と範囲をどんどん拡げて行き、気が付いてみると西暦二〇〇〇年は目前に迫っていたのである。

コンピュータは内蔵された時計(クロック)の刻みにあわせて動き、最終的には我々の所望する時間・時刻がらみの仕事を達成する。それではコンピュータのどこ

に問題があつて「西暦二〇〇〇年問題」なのか。コンピュータには電源を切つても時を刻み続けるRTC(Real Time Clock、超小型電池で動く)が内蔵されている。これは一九八〇年から一九九九年までは正確に動作するよう設計されているが、二〇〇〇年以後どうなるのかについては定かでない。RTCの時間データはBIOS(Basic Input Output System)を介してOSへ伝達され、OSはこれを基に時分秒単位で動作するシステムタイマーを起動、以後RTCとは独立した時を刻む。アプリケーションソフト(いわゆるプログラム)はOS(またはRTC)から時間データをとり込み、西暦年を下二桁で取扱いつつ種々の仕事を行う。極めて端折った言い方になったが、このような過程をみると西暦二〇〇〇年以後、コンピュータの時間・時刻はどうなるのかという不安が当然生じてくる。

一九八〇年代までは西暦年を下二桁で取扱うことは標準的であつたといえる。これに對して一九八九年にANSI(米国規格協会)とISO(国際標準機構)はコンピュータ機器における西暦年四桁対応規格を制定した。日本でも一九九二年にJIS(日本工業規格)が規格化を行っている。しかし規格制定後、全ての機器が規格に沿って製造されてきた訳ではないし、規格制定以前の機器が相当数使われているという現実がある。さらにアプリケーションソフトには西暦年の四桁対応規定はないし、機器の部品としてコンピュータ(マイクログリップ)が使われている場合には、機器製造者、機

(3) コンピュータの問題点と対策

コンピュータは内蔵された時計(クロック)の刻みにあわせて動き、最終的には我々の所望する時間・時刻がらみの仕事を達成する。それではコンピュータのどこ

器使用者共に二〇〇〇年対応の有無を知るのには相当に困難である。ともあれ、西暦二〇〇〇年以後も現在使用中のコンピュータ機器を使用するというものであれば、ハード、OS、アプリケーションソフトを徹底的に調べ上げ、改修すべきところは改修しなければならぬ。改修できない場合、二〇〇〇年対応の有無を確かめられない場合には、機器の「不使用・破棄」といったことも西暦二〇〇〇年問題への対応策の一つとなる。

(4) コンピュータ西暦二〇〇〇年問題は誰の責任か

コンピュータ西暦二〇〇〇年問題の「責任」は誰にあるのか。コンピュータ製造者か、ソフトウェア作成・供給者か、コンピュータ(搭載)機器製造・販売者か、それとも機器購入・使用者か。これに関しては、全ての関係者に責任があるといえる。一般的な見解である。なぜなら社会全体がこのことを容認してきたし、それによって社会全体が大きな利益を受け、今日の社会が成り立っているからである。

(5) 診療業務・病院業務とコンピュータ西暦二〇〇〇年問題

検査部、薬剤部、放射線部などの部門システムを含まれた病院情報システムが西暦二〇〇〇年問題の対象になるのは当然であるが、それにも増して、患者生命に直接関係する生命維持装置、モニター・検査機器・治療機器については細心の注意が必要とされる。一見、コンピュータとは無関係に見える機器でも、部品としてマイクログリップが使用されている可能性が大であるから、電気(電池を含む)を

次期病院長に 整形外科原田征行教授



原田 征行 教授

三月末で任期満了する橋功病院長の後任を選出する選挙が二月十七日行われ、整形外科講座の原田征行(はらたせいこう)教授が選出された。任期は四月一日から二年間。

現在大学病院は工事中の中診療への移転を来春に控えており、更には新外来棟へ向けて再開構想の見直しから、ハード面としての新臨床研究棟、新管理棟など多くの整備計画が進行中である。ソフト面では新外

三月末で任期満了する橋功病院長の後任を選出する選挙が二月十七日行われ、整形外科講座の原田征行(はらたせいこう)教授が選出された。任期は四月一日から二年間。

現在大学病院は工事中の中診療への移転を来春に控えており、更には新外来棟へ向けて再開構想の見直しから、ハード面としての新臨床研究棟、新管理棟など多くの整備計画が進行中である。ソフト面では新外

平成十一年度予算案内示

脳神経血管病態研究施設及び臨床薬理学講座新設、看護要員三名増

昨年十二月二十四日、平成十一年度政府最終予算案の内示が行われ、本学医学部関係では脳神経血管病態研究施設(新脳研)の新設と臨床薬理学講座の増設が認められた。また、医学部附属病院関係では、小児外科、光学医療診療部にそれぞれ看護婦一人が配置されるほか、病棟看護要員として更に一人、計三人の増員が認められた。

新脳研は、平成十年度末に時限を迎え廃止される脳神経疾患研究施設に代わる新設で、教官定員(10)や部門数(客員部門一を含む五部門)は従来通りとなった。本研究施設は昭和四十年に一部門からなる脳卒中研究施設として発足、徐々に充実が計られ、昭和五十七年からはほぼ現在と同様の四部門、教官定員10となつた。平成元年には、施設改組に伴って脳神経疾患研究施設と名称を変え、客員部門一を加えて十年時限で発足した。時代の要請にこたへるため、これまでの成果を踏まえつつも、新たな発展を目指した研究が更に十年の時限で進められることになった。

(佐藤 記)

動物実験施設の現状

―二十一世紀へ向けて―

動物実験施設長 神谷晴夫



いよいよ一九九九年が明けた。いわゆる世紀末で、なんとなく、何かが起こりそう。胎動を予感させる。

ところで、本誌第二号（平成九年九月十七日発行）に、「動物実験施設の現状と将来」と題して、インタビューを受けた記事が掲載されている。その中で、遺伝子操作動物、動物福祉、空調設備の設備更新の必要性、施設運営経費、実験動物学教育の必要性等の問題点に言及させて頂いた。その記事を読み直してみると、動物福祉の問題に関しては、今年度からの医学部動物実験倫理委員会の発足とそれに伴う弘前大学動物実験委員会の実質的稼働によって、全国の関連動物実験施設に先駆けて、本格的な二段階審査による動物実験計画の審査がなされるようになった点は特筆できよう。

さらに、有難い事に空調関連設備の更新が、今年度の補正予算で認められ、教授会でも幾度かその進行状況を報告させて頂いているが、現在、全面的な更新・改修計画が進んでいる。改修計画は、今年の六月頃より約六ヶ月間にわたって実施される予定である。この改修工事では、現行の空調熱源システムを新しいシステム方式に変える事によって、大幅なランニングコストの軽減が期待できる。しかも、この事によって、動物実験施設が慢性的に抱えている、施設運営経費不足の問題が改善される可能性に期待している。その他、この改修を契機により使いやすい施設を目指しているが、その一つの試みとして、実験台の各講座への貸出数を大幅に増やす事を計画している。但し、工事期間中、必然的に、施設での動物実験には、大きな支障が生じる。施設としては、この間、出来るだけ、動物実験が何とか継続して行えるようにとは考えているが、実験者からの従来どおりの要求に比べられるものではない。十七年ぶりの大規模設備更新である事をご理解いただき、この時期に遭遇した実験者のご協力を是非お願いしたい。

しかし、遺伝子操作動物に関しては、最近、その飼育数が急激に増加してきており、近い将来に根本的対応が求められるように思う。この点については、来年度に向けて遺伝子改変動物飼育管理装置を概算要求させて頂いており、早急に対応できるようにする事を期待している。

また、学部学生への実験動物学の講義は、四年次医学概論の中で三回の講義が認められ、大きな一歩を踏み出したと考えている。

このように羅列してみると、懸念の事項が、この世紀末までにはかなり解決されており、関係者のご尽力のおかげと心から感謝申し上げたい。しかし、動物福祉の問題、特に動物実験者の倫理の問題は、実験者の動物実験に関する意識の向上、ひいてはその点に関する教育とも関連し、息長く対応しなければならぬ事と考えている。

加えて、利用者には、動物実験施設が如何に利用度が高く、どのような業績が得られているのかをはっきりと示して頂く必要がある。その事が、今後の動物実験施設の発展に大きく関連する。

放送大学との単位互換制度を利用するには

昨年十一月十八日に弘前大学と放送大学の間での単位互換の調印式が行われ、放送大学で開講されている共通科目（一般科目・外国語科目及び保健体育科目の単位の一部として認定されるようになった（表1）。そこで、簡単にその制度について紹介したい。

表1. 弘前大学における放送大学との単位互換性に関する規則	
放送大学授業科目	弘前大学授業科目
共通科目（人文系）	共通教育科目（文化領域）
共通科目（社会系）	共通教育科目（文化領域）
共通科目（自然系）	共通教育科目（自然領域）
外国語科目	共通教育科目（特設外国語）
保健体育	共通教育科目（健康・スポーツ科学講義）

放送大学の一般科目の単位を修得した場合、共通教育科目の文化領域または自然領域の単位として認定し、個々の科目には対応させない。

放送大学はテレビやラジオを活用した通信制の正規の大学で、学位授与機構を介して学士の学位を取得することが出来る。また、卒業は目的とせず、生涯学習としても有用である。青森県では医学部・附属病院敷地内に設立された青森学習センター（近い将来、文京キャンパスの五十周年記念会館内に移設予定）で、受講の取扱いが行われている。

受講方法は、一、テレビ・ラジオで定時視聴（最近では通信衛星を利用した「スカイパーフェクトTV」のデジタル放送が開始された）、二、ビデオテープ・オーディオテープを借りて学習センターあるいは自宅での学習の二通りがある。今回単位互換の対象になった科目には弘前大学の共通教育で用意されていない様々なメニューがあるので（表2）、大いに利用するのが

るので、施設を利用して書かれた論文にはその点を明記して頂きたい。その事が、今後の動物実験施設の発展・改善に必須と考えるからである。

また、二十一世紀の幕開けとして、西暦二〇〇〇年には、第二十六回国立大学動物実験施設協議会総会を当方で主催する事が決まっている。さらに、紙面の都合上、ここでは触れる事が出来なかったが、山積する難問も多く、今後も関係者の一層のご理解とご支援をあらためてお願い申し上げます。

「毒劇物の取扱い」に思う

毒物等管理検討委員会 委員長 菅原和信



昨年夏のカレーへの亜硫酸入に端を発し、アジア化ナトリウムの混入と、全国で連鎖的に発生した事件が一段落したかと思ったら、インターネットを利用した青酸カリによる自殺補助、また伝言ダイヤル利用による薬物事件と、毒劇物利用の事件が後を断ちません。

国立大学における事件も発生し、文部省通達により、弘前大学においても「毒物及び劇物の取扱い要領」が制定されました。それに伴い、それぞれの部局等に管理責任者を、また毒劇物を保管、使用する研究室に使用責任者を置き、受払簿のもとに管理することになりました。

当医学部においても、毒劇物の履修を申請している。しかし、放送大学の利用は以下の点で問題があり、医学部学生にとっては難しい側面がある。

一、医学部学生は二年まで放送大学専門科目の規定単位をすべて満たさなければ三年に進級できない。しかし、放送大学の単位を組み入れるためには一年目の二ヶ月までに履修の申請をして、二年目の前期まで単位を取得しなければならぬ。即ち、単位不足の補填には利用できない。

物等管理検討委員会が発足し、事故の起こらないように十分管理することになりました。

昨年末の調査で、五十種類以上の毒劇物を所有する研究室も多く、最も多いところは一〇〇種類以上を所有している研究室もありました。保管庫に保管することとは当然ですが、一度にすべてを使用することは無いにしても、連日複数の毒劇物を研究に用いていますし、使用の都度受払簿に記載し、在庫量を把握するとすると、研究者にとっては頭が痛く、研究面での支障を来すことになりかねません。

そこで、管理検討委員会としては、医学部（附属病

院を含む）各研究室での管理を十分行い、かつ扱いやすいマニュアルを作成することが使命の一つになっております。管理方法について良いアイデアをお持ちの方は委員まで一報いただければ幸いです。

ナイフで事件が起こればナイフを持たせない、毒劇物で事件が起これば管理を厳しくする、ということだけで当座は防ぐことができないにしても、長い目で見た場合事件の発生をなくすることができるとは思いませんが、人間としての自覚、良識に待つという時代ではなくなつたのでしょうか。

表2. 平成11年度放送大学共通科目開講授業

一般科目（人文系）	一般科目（社会系）	一般科目（自然系）	外国語科目
生活学入門―日常生活の探求 生活文化史 生活と地球社会 世界の教育 教育の方法 教育心理学 心理学入門 心理学史 フロンティア人間科学 子どもの発達と社会・文化 哲学入門 西洋思想の源流 プラズマ・ミクスと現代 倫理学入門 宗教への招待 国文学入門 近代詩歌の歴史 国語学概論 日本語表現法 歴史学の現在 日本の文化と思想 人文地理学	社会科学入門 法学入門 国家と憲法―憲法の基本問題 政治学入門 国際関係論 経済学入門 社会学入門 社会福祉論 社会調査の基礎 経営学入門 日本の経営・欧米の経営 情報基礎管理 日本の技術と産業の発展 科学と技術の歴史 先端工学	数学の歴史 微積分入門Ⅰ 微積分入門Ⅱ 線型代数Ⅰ 線型代数Ⅱ 確立論 統計学 物理学の世界 物理・科学史 基礎科学 物質の科学と技術開発 基礎生物学 人間の生物学 生物の歴史 病気の成立と仕組み 地球と宇宙（地球編） 地球と宇宙（宇宙編） 宇宙の歴史と人間 科学実験法	英語Ⅰ 英語Ⅱ 英語Ⅲ 英語Ⅳ 英語Ⅴ 英語Ⅵ 英語Ⅶ ドイツ語Ⅰ ドイツ語Ⅱ ドイツ語Ⅲ ドイツ語Ⅳ フランス語Ⅰ フランス語Ⅱ フランス語Ⅲ フランス語Ⅳ 中国語Ⅰ 中国語Ⅱ 中国語Ⅲ 中国語Ⅳ ロシア語Ⅰ ロシア語Ⅱ スペイン語Ⅰ スペイン語Ⅱ

コラム

医学部 こぼれ話

●Z教授は欠席の多い学生を呼びだして説教するので有名。ある学生を呼びだして授業に出るようにコンコンと言いつけた。その学生「わかりました。来週から授業に出ます。ところで先生の授業は何曜日の何時間目ですか？」

●医療短大の入試試験会場の入口に、「受験生入口」と張り紙のしてあるガラス戸と、「試験関係者入口」と張り紙のしてあるガラス戸と、

と張り紙のしてあるガラス戸の二つがあった。受験生の入場が峠を越したところ、一人の受験生が「試験関係者入口」からあわただしく走り込んできた。事務官「ああ君、ここは試験関係者入口で、受験生はあっちの入口から入るんだよ。」、受験生「あの、僕受験生なので試験関係者ですが。」、以来このような張り紙は張らなくなったとか。

（中根 記）

「生涯学習社会における公開講座」

医学部公開講座推進会議

委員長 木村 博人

平成十年度医学部公開講座を振り返って

平成十年度の医学部公開講座は、「続・老いを考える」を総合テーマとし、医学部MCCにおいて四回開講した。当初、本講座が有料（四、四〇〇円）のため、何人位の受講者が集まるのか不安であったが、最終的には定員八十名の所に四十名の受講者であった。この人数は予想より少ない印象であったが、医学部公開講座として初めての開講でもあることから今後に期待したい。開講初日は遠藤医学部長の「医学部のベストメンバーを揃えました」という挨拶から始まり、花田助教授の軽妙な語り口で講義に移るや、受講者は熱心に聞き入っていった。他の三名の講師陣も非常に講義が解り易く、ユーモアも交えて七十五分間の講義も束の間のような気にとせられた。

マとし、八月二十日から九月十日までの間に、一回八十分の講義で七回開講することとした。受講料は五、四〇〇円、一回当たり七八〇円弱となることから、若干でも「受講料の負担感」が軽減されると思われる。講義の開始時間を前年度より三十分早めて、午後六時から七時二十分までとしたが、会場、受講対象、定員は前年度と同様である。

開講日と講義題目、講師の予定は以下の通りであるが、一人でも多くの受講者が聴講するように広報活動を工夫したいと考えている。

八月二十日（金）「医療と麻酔の進歩」松木教授（麻酔科）。八月二十四日（火）「臓器移植の現況」佐々木教授（第二外科）。八月二十七日（金）「頭痛の診断と治療」鈴木教授（脳神経外科）。八月三十一日（火）「生殖医療技術の進歩」藤井講師（産科婦人科）。九月三日（金）「アレルギーの治療」松原講師（耳鼻咽喉科）。九月七日（火）「白内障と眼内レンズ」桜庭講師（眼科）。九月十日（金）「内視鏡技術の進歩」棟方教授（第一内科）。

平成十一年度医学部公開講座の予定

平成十一年度は「医学・医療の最前線」を総合テーマとして、八月二十日から九月十日までの間に、一回八十分の講義で七回開講することとした。受講料は五、四〇〇円、一回当たり七八〇円弱となることから、若干でも「受講料の負担感」が軽減されると思われる。講義の開始時間を前年度より三十分早めて、午後六時から七時二十分までとしたが、会場、受講対象、定員は前年度と同様である。

な機関であり、大学の教育研究活動に関する情報を社会に対して提供することは、大学の社会的な責務である」とし、大学情報を積極的に一般国民に提供することが求められている。生涯学習機関としての「大学」による公開講座は、大学の学術研究・教育の成果を直接社会に開放し、地域住民・成人一般に高度な学習の機会を提供するものであり、医学部公開講座もその一翼を担うものとして位置付けられている。今後関係各位の御支援をお願いする次第である。

「新カリキュラムを経験して」

医学科4年 高山 研



一九九五年四月に入学した私達の学年から新カリキュラムが導入されました。それから四年がたち、新カリキュラムについての全体像がようやく把握できるようになってきた今、自分なりに新カリキュラムについて

の印象を述べたいと思います。四年間教育を受けてきて感じた印象はこの新カリキュラムが「とりあえず変えてみたカリキュラム」であるという事です。本気で「変えよう」と思って変えたカリキュラムではないなと思いました。なぜなら新カリキュラムの教育を受けてきて「なぜ、何のためにカリキュラムを変えたのか」、「この新カリキュラム全体の目標・理念は何なのか」ということを悟るこ

社会人入学者に対する

大学院の昼夜開講制について

学事委員長 松本 明知

大学院改善の一貫として、平成九年（一九九七）年度から所謂大学院講義が開始され、平成十年（一九九八）に二年目を迎えている。この間講義する側、講義を受ける側から種々御意見を頂いたが、芳しくない意見が大半を占めた。教官側の意見として、曰く院生たちの目が死んでいる、曰く殆ど居眠りをしている、曰く目が怒りに燃えている、曰く欠席者が多いなどである。

このような状態では、折角の大学審議会の答申「二十一世紀の大学像と今後の改革方策について」競争的環境の中で個性が輝く大学」では、「大学は公共的

に提供すること」を積極的に提供すること

平成十一年度医学部公開講座の予定

平成十一年度は「医学・医療の最前線」を総合テーマとして、八月二十日から九月十日までの間に、一回八十分の講義で七回開講することとした。受講料は五、四〇〇円、一回当たり七八〇円弱となることから、若干でも「受講料の負担感」が軽減されると思われる。講義の開始時間を前年度より三十分早めて、午後六時から七時二十分までとしたが、会場、受講対象、定員は前年度と同様である。

とができなかったからです。その位、旧カリキュラムに比べて変化が小さかったという事です。「六年一貫教育」、「共通教育」、「系統別講義」など名前はいろいろ変わりましたが、その中味はというと時間割が少しく変わった、新しい科目がいくつかできたというくらいで、全体的な流れは旧カリキュラムとあまり変わっていません。この新カリキュラム自体の完成度があまり高くないことも「とりあえず変えたカリキュラムだな」と感じた理由の一つです。時間割での授業の配置（二年次において共通教育の再履修科目と専門科目の時間割が重なってしまった。また五年次のSGTにおいて、午前中に実習をして午後は講義という無理なスケジュールの曜日が設定されていた）、試験の日程（半期の十五回目の授業の時にその科目の試験を行うというシステムになった。よって別の科目の授業の後に試験があったり、試験の後に実習があったりする）など細かな点で配慮がなされていないように感じます。

カリキュラムが変わって良かった点、悪かった点を考えた時、私が指標としたのは世の中の時代の流れにこのカリキュラムが合っているかどうかという点でした。医学・医療が時代とともに変革しているのと同じようにカリキュラムも変わらなくてはならないのは当然のことだと思えます。まず良かったと思う点は医学英語とEarly Exposure（早期体験学習）という科目が設けられたことです。日本社会においては英語の重要性は高まっています。この医学英語の設置

はこのような世の中の動きに対応したものであるといえます。また、Early Exposureというのは一年次に大学病院や学外施設といった医療現場を見学し、その実態を知るといいうのもですが、理論と同時に実践も重視するようになってきた世の中の動きにこの科目は即していると思います。しかしながらこの二科目についてはまだまだその内容に改善の必要性があると感じました。次に悪くなったと思う点ですが、それは学生が勉強できないようなシステムになってしまったという事です。先程述べた試験日程や旧カリキュラムに比べて授業の日数自体が減ってしまったことで満足に勉強ができなくなっていました。医学・医療の進歩とともに新たに説明された内容も増加しています。当然学生が学ばなければならぬ量も増えていきます。このような時代の中で授業時間数が減り、学生に教える内容も減らざるを得ないという動きは時代の流れに逆らったものといえるでしょう。

全体を通して私が一番言いたいのはカリキュラムの目標・理念をもっと明確に、具体的にすべきだということです。教育というのは人を育てるということです。学生をどのような医師・研究者・社会人に育てるのかという根本的なテーマがなければ教育することはできません。現在の新カリキュラムの教育方針（テーマ）は「生命現象に対する豊富な知識と鋭い洞察力を身につけ、病気を科学の目でとらえ、広い視野に立って物事を考えることができる」となっています。もっとも

の専攻分野と異なっている、曰く余り先端的でないなどの意見も出されている。授業者、受講者の両方から不満の声が出され、受講カードを提出したが、出席日数が不足して単位を取得出来ない人も少なくない。では一体どうしてこのような事態になったのであるのか。これを理解するためには何故講義が始まったかを知ってもらう必要がある。第一の理由は、大学院という制度があり、カリキュラム上、講義があるはずであるが、以前は実際に何もなかった。このため大学改革の一環として整備し、名と

医学部は他の学部とは異なり、学問を教えるという研究者を育てるという使命がある。その分教育というものが大事になってきます。人間を教育するということは難しく、大変なものです。だからこそ、妥協や手抜きが許されないと考えます。教育される側は敏感にそれを感じ取るものです。カリキュラムを考える時、本心に学生のためを思って考えないと学生側と教官側の信頼関係は築けません。教育も医療と同様に人との関係が土台となっています。学生と教官が逃げずにお互い真正面を向き合うことが大切だと思います。

弘前医学 創刊50周年

弘前医学創刊五十周年第五十巻

刊行記念事業について

弘前医学編集委員長 元村 成

「弘前医学」は昭和二十五年五月一日に第一巻一号が創刊されてから着実に発刊され続け、本年五月に五十周年を迎えます。創刊以来年一巻を上回るペースで発刊され続けられており、昨年九月三十日には第五十巻一号が既に発刊されています。これは偏に歴代の編集主幹、編集委員長、編集委員の先生方の一方ならぬご尽力の賜物ですし、それにも増して、弘前医学に投稿してくださった著者の方々の熱意の賜物です。弘前医学創刊五十周年第五十巻刊行を記念して、いくつかの事業を計画しております。「医学部ウォーカー」の紙面をお借りして、「弘前医学」並びに「記念事業」について宣伝させて頂きます。

「弘前医学」発刊の辞
弘前大学長 丸井 清泰
私は医学界に同じ様な種類の雑誌が乱立して発行される事は望ましくありません。内容と実質を持つものが限られた数に於て存する事を平生希望しているものであるが、医科大学や医学部研究業績発表機関ということになる問題は全然別である。各大学や各学部はそれぞれ独自の機関をもつべきであると考えている。しかし、これは大学の重要な使命の一たる研究の記録であり、又学内に進行しつつある研究業績を広く内外の学界に示すものであるからである。私共が今回発刊される「弘前医学」に主として原著論文だけを掲載する事にした理由は実に此処に存するのである。本誌の発刊と共に私共の責任が著しく加重された事を痛感する。

弘前医学第一巻第一号

手元にあります弘前医学第一巻第一号を見ますと、編集委員として、荒川雅男先生、松永藤雄先生、佐藤熙先生、高橋英次先生と弘前大学医学部創生期の先生方のお名前が連らなっておりますが、この四名の先生方は皆様に他界し、五十年という時間の長さを身を持って感じる次第です。この弘前医学第一巻第一号には、目次の第一ページの前に、初代弘前大学長の丸井清泰先生の「弘前医学」

の要旨も、前号での「医学部学術賞」の概要と同じように掲載することができました。第一二八回以前の例会で、数名の不届き者が抄録を提出していないせいで、未だに掲載されていない会が数回あります。言葉は悪いのですが、在庫一掃をして、未提出のものは演題と氏名と所属のみを記載して、三月末の三、四合併号に掲載しようと考えています。みつともないと心当たりのかたはご一報下さい。

昭和二十五年五月

第一巻第一号第一ページからの論文も、丸井清泰先生による「神経細胞の細胞学的、細胞生理学的、細胞病理学的知見批判」という総説です。更に、第五十四ページには高橋信次先生の「X線廻転撮影法の臨床的応用」という先見的論文が掲載されています。そして全ての論文に英文抄録（abstract）が別ページ仕立てて付いております。創刊時の大いなる気概を感じます。

弘前医学第五十巻

昨年四月から編集委員長をお引き受けし、投稿規定の改訂を行い、第五十巻は既に一号と二号を数えています。第一号では故松山秀一名誉教授の追悼文を掲載させて頂きました。この三月には三、四合併号が発刊される予定です。第五十巻第一号から全て新しい投稿規定に沿って印刷されております。これに沿って、第二号には第一二八回弘前医学例会の抄録が、流し書きでなく、そのままオフセット印刷されました。又、例会での「シンポジウム」

の要旨も、前号での「医学部学術賞」の概要と同じように掲載することができました。第一二八回以前の例会で、数名の不届き者が抄録を提出していないせいで、未だに掲載されていない会が数回あります。言葉は悪いのですが、在庫一掃をして、未提出のものは演題と氏名と所属のみを記載して、三月末の三、四合併号に掲載しようと考えています。みつともないと心当たりのかたはご一報下さい。

弘前医学創刊五十周年第五十巻刊行記念事業

遠藤医学部長を執行委員長として、昨年十一月に弘前医学創刊五十周年第五十巻刊行記念事業実行委員会が発足し、記念事業の大筋が決定し、一部は既に実行に移されています。記念祝賀会を後述の如く、本年五月二十一日（金）（平成十一年度鵬桜会総会の前日）に医学部コミュニケーションセンター（MCC）で開催する予定です。これを含めて、箇条書きにして、記念事業の進捗状況をお知らせしたいと思います。

「弘前医学」編集業務の充実化

記念事業実行委員会が発足する前の弘前医学編集委員会、医学部図書館長の工藤一教授より五十周年記念事業として「弘前医学」編集業務の充実化という素晴らしい御提案があり、先ず持ってこれを記念事業の第一とさせて頂きました。弘前医学編集委員会が医学部図書館内にあることはご存知のことと思います。これ幸いと医学部図書館内の諸設備、特にコンピュータを弘前医学の編集業務に使用させて頂いております。

た。そこで、弘前医学編集部で独自の専用パーソナルコンピュータを取得して弘前医学の発信基地にしようという御提案でした。編集委員長として心から御礼感謝申し上げます。早速、第一回実行委員会で承認され、学部長からの予算で既に購入し、インターネットにも接続し、活躍が始まっております。

「弘前医学」記念号の発行

第五十一巻一号（本年六月末発行予定）を五十周年記念号にします。そのための準備が進行中です。（一）第五十一巻一号から「弘前医学」の装丁を一新し、B5判からA4判に大きくし、表紙のデザインも替えます。表紙のデザインは現在募集中です。募集要領は第五十巻二号の配布時、第一二九回医学部例会プログラム配布時に既にご案内しておりますが、今回は「医学部ウォーカー」にも募集要領を掲載させて頂きました。四月末が締め切りですが、既に素晴らしいデザインが届いております。まだ時間がございますので、奮っての応募をお待ちしております。

「弘前医学」編集業務の充実化

もちろん、副賞がございませう。（二）記念号には先ず、医学部各講座・部門からの英文ミニレビューを掲載する予定です。こちらは五月末が原稿締切ですので、よろしくお願い致します。（三）更に、五月二十一日の記念講演祝賀会での講演等も掲載したいと考えております。

三、稀観図書展「西欧医学の系譜」

松木明知教授（麻酔学）の御蒐集の稀観（きこう）図書が、松木教授の御厚意で五月二十一日・二十二日の

記念祝賀会の当日と翌日の鵬桜会総会の日、医学部コミュニケーションセンター（MCC）に展示されることになりました。展示図書の「図録と解説」も松木先生が製作して下さいという、将におんぶにだっこの企画です。展示図書の内容は、展示会名の「現代西欧医学の源流」から推察できます通り、一九九四年にアメリカ医学図書館協会が、過去二五〇〇年にわたる医学の歩みの中で後世に大きなインパクトを与えた貴重な医書一〇〇冊を選び、全米各地の医学図書館から借り出してニューヨークのグロリーエーククラブで展示会を行った（松木先生の「図録と解説」から引用）、その一〇〇冊の中の松木先生御所蔵の四十三冊が含まれます。第一冊目Hippocrates (460 B.C.-ca.370 B.C.).

omium longe principis--- Rome: Calvus, 1525. Editio princeps in Latin of the corpus of writings attributed to Hippocrates. ずす。Aulus Cornelius Celsus (fl. A.D. 50-70), Galen(A.D. 129/130-199/200)に続ぎます。十六、十七世紀の Andreas Vesalius (1514-1564), Bartolomeo Eustachi (ca. 1500/10-1574), William Harvey (1578-1657)とぎる。さすがに医学史に疎い小学生でも聞いたことはある人名です。十九世紀に入りまして、あの人の人が目白押しです。「図録と解説」の素晴らしいには今からドキドキいたします。写真一三〇枚（内カラー八十九枚）の各々に松木先生の解説という代物です。実行委員会としてどういう形で協力できるか、最善を尽くす所存ですが、松木先生のこの素

晴らしい展示に対し心より御礼申し上げます。

四、記念講演会・祝賀会

前述の如く、本年五月二十一日（金）午後五時より（時間は予定です）、医学部コミュニケーションセンター（MCC）で、記念講演会並びに祝賀会を開催します。記念講演会の特別講師は山形大学医学部外崎昭先生（解剖学第一）にお願いすることにいたしました。又、記念品についても現在検討中です。

これらの記念事業を遂行するにあたり、弘前大学医学部、弘前大学医学部同窓会、弘仁会、弘前医学会には予算化の段階からご協力を頂いております。この場をお借りして御礼申し上げます。何卒よろしくご配慮の程お願い致します。

「弘前医学」表紙デザイン募集中

平成11年1月11日

「弘前医学」(医学雑誌) 表紙デザイン募集

「弘前医学」は昭和25年5月創刊以来、昨年は記念の第50巻を発刊し、本年は50周年を迎え、5月21日（金）には「弘前医学創刊50周年第50巻発刊記念祝賀会」が計画されております。これを機会に本年6月末発行予定の第51巻の50周年記念号から、雑誌の大きさをB5からA4サイズにし、また、表紙のデザインも一新したいと考えています。そこで、表紙デザインを下記の要領で募集することにしました。「弘前医学」にふさわしい、未来を志向した作品を期待したいと思います。奮ってご応募頂ければ幸いです。

【応募要領】

- 応募資格
弘前大学医学部・附属病院の教職員、医員、医学研究科大学院生、医学部学生及び弘前医学会会員。
- 応募作品
(1) A4サイズの用紙にデザインを制作し、作品の裏に氏名、連絡先を書いて下さい。別紙に簡単な説明文を添えて下さい。デザインは、オモテ表紙のみとし、ウラ表紙は目次に当てる予定です。
(2) 描画手法は問いません。
(3) 配色は2-3色までは可能です。
(4) 雑誌タイトル、巻号、発行年を入れてください。入れる場所や書体は自由です。なお、従来オモテ表紙に掲載されていた論文の目次は、前述の如くウラ表紙に移動します。
- 締切日と提出先
(1) 締切日 平成11年4月末日
(2) 提出先 弘前大学医学部 「弘前医学」編集委員会宛（附属図書館医学部分館内）
〒036-8562 弘前市在府町5番地 TEL 0172-39-5231（編集係）
- 審査と採用作品の発表
(1) 審査は、弘前大学医学部「弘前医学」編集委員会が行います。
(2) 発表は、平成11年5月中旬掲示板に掲示します。採用作品は弘前医学第51巻1号より使用します。なお、「医学部ウォーカー」8号（平成11年3月発行予定）に募集の記事を掲載し、審査結果については9号に発表します。
- 授賞式
採用作品 1点 賞状と副賞
授賞式は、平成11年5月21日（金）に予定されております「弘前医学」創刊50周年記念パーティー席上にて行います。
- その他
(1) 作品は未発表のものに限ります。
(2) 作品の著作権は弘前医学編集委員会に帰属します。
(3) 応募作品は原則として返却しません。
(4) 掲載するに当たり、作品に手を加えることがあります。

「弘前医学」編集委員会
編集委員長 元村 成

各賞受賞者紹介

弘大医学部附属病院診療奨励賞 — 第一回授賞式行われる —

平成十一年二月十二日
(金) 医学部コミュニケーションセンターにおいて附属病院診療奨励賞の授賞式が行われた。診療技術賞として「第二内科循環器救急診療システム」、全静脈麻酔、とくにDFK法、P FK法の開発とその臨床応用」の二題が選ばれ、それぞれ第二内科循環器グループ(代表・藤野安弘、内科学第二講座講師)と麻酔科TIVAグループ(代表・坂井哲博、麻酔科講師)へ橋本 功病院長より本賞の盾と副賞として財団法人弘仁会からの奨学金が贈呈された。また、心のふれあい賞は「放射線部を生け花で装飾し患者サービスにつとめた」ことで放射線部グループ(代表・山田 操、放射線部事務補佐員)へ同様に本賞の盾と副賞として財団法人弘仁会からの奨学金が贈呈された。この後、原田征行選考委員長より選考経過が報告された。診療技術賞では循環器グループの地域医療への貢献と麻酔科TIVAグループの長年にわたる実績と安全性が高く評価され、心のふれあい賞では環境美化の努力とボランティア活動の実績が評価された。



弘前大学医学部附属病院診療奨励賞：受賞風景、右端より橋本 功病院長、第二内科 藤野安弘講師、麻酔科 村岡正敏助手、放射線部 山田 操さん

第十七回唐牛記念医学研究基金助成金受賞者

第十七回唐牛記念医学研究基金助成金受賞者が以下の四名に決定され、一月十九日医学部大会議室に吉田豊学長および増田孝介みちのく銀行頭取をお迎えして授賞式が行われた。



受賞の挨拶をする瀬谷助手
右隣は玉井講師

第三回弘前大学医学部術賞

第三回弘前大学医学部術賞授賞式が二月十二日メデイカルコミュニケーションセンターで行われ、受賞者には賞状とメダル(鶴桜会賞)が贈られた。今回の受賞者と受賞対象となった研究は次の通り。(敬称略)

◆特別賞
澤村大輔(附属病院皮膚科講師)「全身体疾患に対する表皮細胞を用いた遺伝子治療」



左から小山 基先生、孟 宛民先生、廣田和美助手、澤村大輔講師

◆奨励賞
孟 宛民(皮膚科学講座)「皮膚に存在する細胞を標的とする遺伝子治療の基礎的研究」

小山 基(病理学第一講座)「脾臓細胞アポトーシス機構の検討—インスリン非依存型糖尿病モデルGKラットの蔗糖感受性について—」
当日は午後三時十五分から弘前医学会例会の中で受賞記念講演も行われ、いづれも学術賞受賞にあふわしい優れた研究であることが学内にも広く理解された。授賞式では、選考委員長の泉井教授から非常な接戦で厳しい選考となったこと、そこに本学の明るい未来が見えることが述べられた。(佐藤 記)

第二回弘前大学医学部国際化教育奨励賞

第二回弘前大学医学部国際化教育奨励賞受賞は次の五名に決定され、二月十二日に医学部コミュニケーションセンターで授賞式が行われた。この賞は本学部内外における国際的交流を通じ、国際化教育の推進を奨励し、国際交流研究委員会が決定した。(蔵田 記)



左から八木橋操六教授、高橋元助教授、佐々木基一講師、鈴木宗平教授(竹内功助手代理)、尾金一民助手

海蔵寺寄贈のピアノお披露目

— 院内クリスマスコンサート開催される —



左は海蔵寺ご住職、右は亀田和子看護部長

入院患者さんのためのクリスマス・コンサートが昨年十二月二十五日(金)に附属病院待合ホールにて開催された。そこで使用されたピアノは故松山秀一名誉教授の菩提寺である海蔵寺からのご寄附を受けて購入されたものである。海蔵寺のご住職は故松山秀一名誉教授の生前の医学や音楽に対する情熱と高い見識、そのお人柄に感動され、当医学部松山音楽基金にご寄附を申し込まれた。遠藤正彦医学部長を中心にその使途を考えた結果、入院患者さんのためのコンサートにおいて使われることの多いと思われるピアノの購入が教授会で決定された。(新川 記)

人事異動

● 医学部

● 辞職
10・12・15
脳神経外科 助手
木村 正英(青森市民病院)
10・12・31
外科 第一 助手
清水 将之(清水クリニック)
(開業)

● 採用

10・12・16
内科 第三 助手
日向 豪史(医員)
11・2・1
外科 第一 助手
山田 芳嗣(医員)
昇任
11・2・1
泌尿器科 講師
高橋 伸也(医学部助手)

● 附属病院

● 復職
11・1・3
泌尿器科 助手
小林 大樹
(10・4・11・11・1・2)

● 採用

11・2・1
脳神経外科 助手
赤坂 健一(一関病院)
11・2・1
脳神経外科 助手
浅野 研一郎(一関病院)
昇任
11・1・1
耳鼻咽喉科 講師
藤田 繁俊(附属病院助手)
11・3・1
整形外科 講師
坪 健司(附属病院助手)

編集後記

* 啓蒙も過ぎ、虫達も春の匂いを感じ始めています。うです。我々は季節に関りなく活発に活動しています。本号をご覧になれば、この冬も遠藤医学部長を中心に医学部が活火山のごとく活動している様子を知ることが出来るでしょう。企画した話題の中で時期尚早の記事もあり、今回は六頁でお届けします。

* 免疫システムの根本は「自己」と「非自己」の識別です。それでは「自己」とは何かというところになると、「自己」は絶対的に「自己」とはいえない状況も生じます。即ち、「自己」を完璧に捉えることは難しいのです。

* 同様に、我々が「自己」を知ることは極めて困難であると思います。ですから、自分の研究・教育・診療等の「自己点検」は可能ですが、「自己評価」というのは、本当に可能なものかといつも感じます。

* 今日夜遅くまで大学に居た。だから一生懸命やっていると思っていられるだろう。という「自己満足」では何ともなりません。

* やはり、第三者の評価を受け、「己の真の相(すがた)」を見つめ直す姿勢も必要ではないでしょうか。

* 果報は寝て待て。改革の嵐から身を潜め、嵐が通り過ぎるのを待てばよい。しかし、今は「嵐」ではなく「秋雨」かもしれない。これから本場の「嵐」が来るでしょう。

* 話は変わりますが、他の教授には及びませんが、少しずつ仕事が増えてくると、自分のクローン人間が居れば楽だろうと不謹慎に考えてしまいます。きっと、遠藤医学部長は十人ぐらいのクローン人間が必要でしょう。でも、それも怖い気がしますが……。(中根 記)